

聴き合う



9月のミヤマシウド。ウドも花が咲くとこのように美しい。決して“ウドの大木”でない。

ロビン・ウィルアムス主演の映画「奇跡の輝き」は、事故で子供と夫を亡くした悲しみから自殺し、そのため地獄に堕とされて苦しんでいる妻アニーを、先に天国に行つて安穩と過ごしていた夫クリスが救うというストーリーですが、描かれていた天国があまりに美しく平和だったので、こんなところなら行つてもいいかと思つたほどでした（一方地獄は暗くおぞましかった）。しかし、ここでの主題は、天国と地獄のことではなく、この映画のせりふと字幕スーパのギャップから考えたことについてです。

ロビン・ウィリアムスが昔を偲んで語る場面で、映画の中のせりふは、ウィ・ハブ・リッスン・トウ・イーチ・アザー（互いによく聴き合った）^① だつたのに、字幕に、「わたしたちはよく話し合った夫婦だつた」と文字がでたので、一瞬、おや変だ、字幕の日本語訳では英語の「聴く」が「話す」になつていて逆ではないかと思つたのですが、映画がともかくおもしろく、そのときはそのままにして、しかし、何となくひっかかるので、見終わったあとにも気になっていました。

英語では「聴き合う」と言っているにそれを日本語に直すと「話し合う」になるのは、「聴き合う」という言い方がわれわれにはなじまないからなのだと気が付きました。「聴

き合う」って、なんとなくへんです。なぜなじまないのか。それは、「互いに聴き合う」ということが日常的にあまりなされていらないからでないでしょうか。

例えば、われわれは話し合うというし、話し合ったと言います。上は国家天下を論じる大議論から、下は巷の世間話まで、およそ、話し合うと言っているとき、たいがいの人がやっているのは、じつと聞き耳を立てて静かに相手の話を聴くのでなく、早く相手の話が終わらないかと待ちかまえていて、終わると聞いたことはそばに置いて（本当はしっかりと聴いていないから聞いたことになっていないのですが）、ともかく自分の思っていることを聞いてほしくて話し始める、これが「話し合う」といっているときの実態のように思えます。これではいくら話し合っても互いに理解することはできない。独り言を互いに投げ合っているようなものですから。

どこかになにかの施設を建設することになったとき、それがあまり歓迎されない施設である場合、建設側とそれを受け入れる側との話し合いがこじれることがあります。技術的な問題が取り上げられ、建設側がそれに誠実に答えても、どこかすつきりしない納得出来ないものが残ってしまう。政治的な思惑から意図的に納得しないでおくことがあ

りうることも知らないわけではありませんがそれは、どこかすつきりしない一番の原因は、相手の言うことをよく聴き、そのことに直截答える、そのようなスタイルで話し合いがなされていないからだと思います。

最近、「聴く」ことの重要性がすこしずつではありますが、とりあげられるようになってきました。学問の領域でも実践的な領域でも、まず聴く、聴くことに徹する、それから初めてなにかを始める、そんな動きが現れてきたのを見ることができます。「聴くこと」は決して受動的な態度でなく、むしろ聴く側の人格まであからさまになる能動的・積極的な態度に思えます。

おしゃかさんは、よく聴け、とおっしゃいました。そして自らもよく考えよ、まさにおまえのために説くのだからと。諦聴諦聴、善思念之、当為汝説。その先にはきつと広い大きな世界が広がっているのに違いありません。

(二〇〇五年十月十八日)